

主の昇天
ルカ 24・46-53

2013.5.12 9:30 ミサ
オリビエ・シェガレ
(パリミッション会司祭)

イエスが昇天しました。これはどういう意味でしょうか。

まず昇天の天ですが、天のイメージはそれぞれの文化圏によって違うでしょう。旧約聖書の天地創造の天は下にある地と対照的に上にある世界を指しています。旧約は三つの天が分けられていた。鳥が飛ぶ天。星が輝く天、そして一番上に神が住まわれる天。この天の言葉をギリシャ語に翻訳した時、新約聖書はウラノスという言葉を使いました。ウラノスは元々神格化された天空のこと。そこに神々がおられる。この天のイメージはいわばキリスト教の天国、この世とはかけ離れ、神が住むあの世というイメージに重なってきたと思われまます。これに対して中国の影響を受けた日本では、天のイメージは宇宙万物を支配する法則というイメージがある。この法則は絶対的で、運命・宿命の根底にあり、人間は天の命令というものに逆らえない、逆らってはいけない。人間はあきらめてそれに従うしかない。これはもちろん愛を信じるキリスト者の世界とは無縁の世界観。ところが科学の影響を受けた現代では、天は天文学の天というイメージに変わり、神とは関係ない無限な物質でしかない。また漫画の影響を受けた子供のイメージは、天が宇宙戦争の場ではないだろうか。天はイエスが宇宙人となって、敵を滅ぼした、支配している世界。これも教会の世界観とは言えそうもない。ところが教会の一般信者にとっての天のイメージはどうでしょうか。今でも天国の天ではないか。この天国は死後の世界であって、良い人々のために用意されている憩いの場。入るためには涙の谷であるこの世の苦しみに耐え忍び、徳を積んで天に上り詰めていく必要がある。これは明治時代の宣教師たちが日本に伝えていた天のイメージではなかったかと思ひます。

しかしイエスの伝えた天の国の天はこのイメージとも大分ちがっていたように思ひます。天は死んだ後の、上にある遠い所、

別世界のような所にあるのではなく、神が共におられる私たちの現実のなかに隠れている。「天の国はここにある、あそこにあると言えるものではない。実に天の国はあなたがたの間にある」(ルカ 17・20) とイエスが弟子たちに教えています。またたとえ話の中に天の国は畑に宝が隠されているもの。見つけた人はすべてを放棄して、その畑を買い取る」(マタイ 13・44)。隠されている畑は私たちの生活ではないだろうか。そこにこそ目を向けて、隠されている天を求めべき。

イエスの昇天の話に戻りますが、今日の箇所をよく読むとイエスが天に上がったのではなく、上げられた、あるいは取り上げられたと書いてあります。イエスは自らどこかに昇ったのではない。むしろ取り上げられ、神様が共におられる現実の中に入っておられた。パウロがいうように「イエスは自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じものになられた。人間の姿であらわれ、へりくだって、死に至るまで従順でした。このため神はキリストを高く上げられた」。イエスが上に昇ったという意味ではなく、イエスが神の栄光に与り、ご自身の身分が高く上げられたということでしょう。このことこそ昇天を祝う私たちの信仰であります。そうするならばイエスのおられる天は雲の上の遠い所ではなく、神が共におられる私たちの現実の中におられるということになります。

第一の朗読の使徒行伝に弟子に現れる天使が言っています「何故天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、またおいでになる」と。キリスト者は天に目を上げていない人ではない。イエスがおいでになる現実の中に目を向けています。12人の使徒はこの言葉を誤解して、イエスはすぐ戻ることを信じていたらしいですが、イエスがおいでになるという現実空間と時間を越え、徐々に完成しつつある神の国そのものであると解釈すべきでしょう。こうしたいわゆる終末の信仰に励まされた使徒たちは、やがてエルサレムを出て、全世界の人々に向かって、イエスは皆の現実においでになるという福音を伝え始めた。神様は遠い世界、遠い天国にいるのではなく、あなたがたの現実の中におられる。この福音を伝えるために、イエスの弟

子である私たちが派遣されていると言ってもいいでしょう。言葉と生き方を持って私たちはこの福音を証ししている。このことを誰よりも悟っていたのは小さき花の聖テレジアであったと思います。カルメル修道会に入ったばかりの若い彼女は徳による完成、彼女の言葉で言うと完徳の頂点へ達し登りたいと思って、自分の体を鞭で打ったり、断食を繰り返したり、苦しい修業を積んで一生懸命努力していたが、ある時に神様の声が聞こえたという。「昇りをやめて、降りなさい」。彼女が「どこに」と聞くと、「私はいる、あなた自身の貧しさに」。この声を聞いた聖テレジアは生き方の方向を変えて、いわゆる小さな道、イエスがたどったへりくだりの道、目立たない道を選び、日常の飾りのない平凡な現実の中にある天を求め始めました。そして彼女は、世界の人々に、理想の世界ではなく、共におられる神様を現実の中に捜してくださいと訴え、宣教師たちを支え、日本をはじめ世界の人々のために祈り、宣教の保護聖人となったわけです。

どうか私たちも聖テレジアのように、私たちの現実においでになるイエスを信じ、できれば多くの人に愛と希望の福音を伝えることができますように祈りたいと思います。